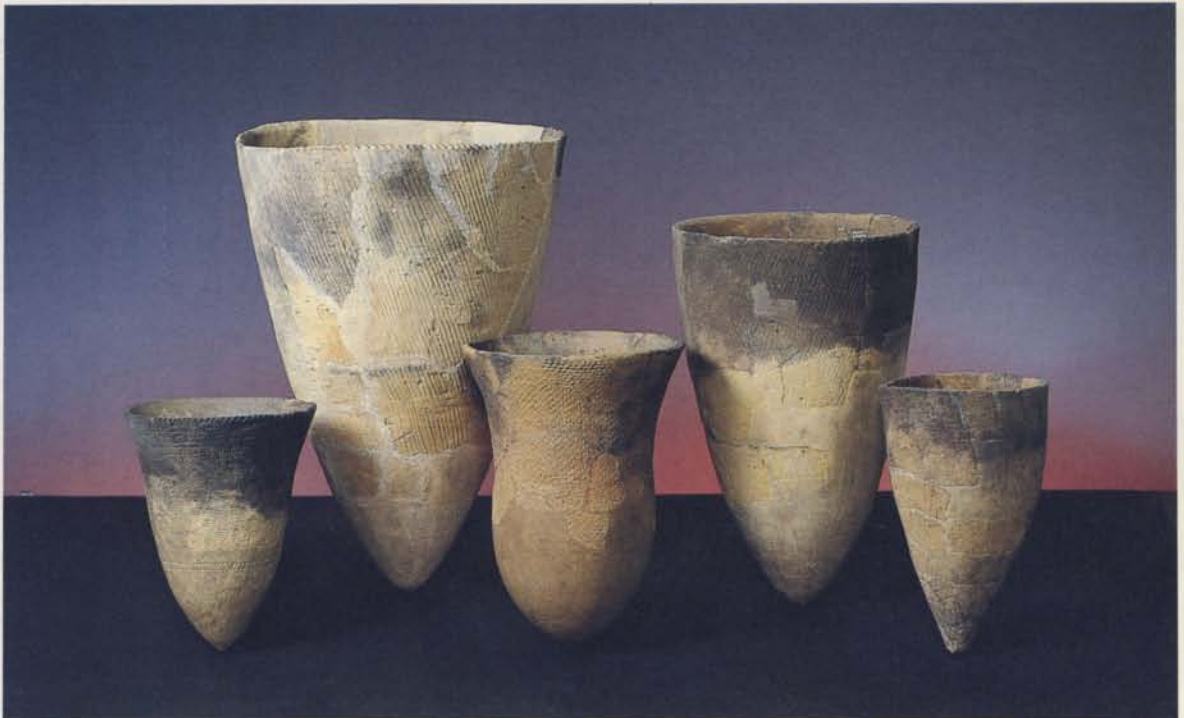


たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報 No.26 平成4年10月31日



縄文時代早期の土器群
多摩ニュータウンNo.307遺跡
(八王子市鐘水) 撮影 星野 薫

足元を見詰めて

所長 森久保 啓二

夏目漱石の小説「門」に主人公が禅寺へ行き「父母未生以前本来の面目」という公案を貰い座禅をした話が出てくる。

公案の回答は分からないが、父母未生以前遙かな昔、古代の人達がどのような生活を営んでいたかは誰しも興味湧くところである。その回答を与えてくれるのが私たちの足元、地下に埋まっている埋蔵文化財である。

それらの埋蔵文化財を開発者との調整を図りながら、発掘し調査研究を行って先人達の生活（最近では江戸遺跡の発掘も実施している）を明らかにし、その成果を公開し将来にわたって貴重な文化財を保存してゆくことが私達センターの役目である。

しかし、一口に先人達の生活を明らかにするとと言っても、並大抵のことではない。過去の多くの研究成果に加えて、毎日の地道な努力の結果少しずつ明らかになってくるもので、一つ一つの小さな遺物の積み重ねと一歩一歩着実に進めてゆく研究とによって成果が現れてくるものである。これらの地道な努力を着実に進めてゆくことが埋蔵文化財センター本来の面目ではないかと考えている。

禅寺の玄関には「脚下照顧」と書いた木札が置かれている。私達も、今後ともしっかりと足元を見詰めて一歩一歩前進を図り都民の皆様への期待に答えてまいりたいと考えている。

遺跡だより③



縄文時代中期土器の出土状態

今回は稲城市坂浜30号のNo.9遺跡を紹介します。遺跡は三沢川の支谷に北東に伸びる広大な緩傾斜面上にあり、面積は二八、〇〇〇㎡と大規模な遺跡です。本年度は遺跡の西半分を中心に一〇、〇〇〇㎡を調査中です。

遺跡は中近世・奈良・平安時代・縄文時代の複合遺跡として登録されていますが、調査を行って見ますと、縄文時代以降の遺物が包含されています。黒色土がすでに取られており、表土層の下にロームが現れます。そのために中近世・奈良・平安時代の遺構は壊滅に近

い状況です。

そのため、現在残されているのは主として縄文時代前・中期の遺構・遺物です。前期後半諸磯a・b期、中期後半加曾利E期が見られますが、主体を成すのは加曾利E期です。

遺跡の中央部に北東に埋没谷が見られ、この谷頭の西から北側にかけて堅穴住居址が造られています。谷の南側では土坑が多く見ら

れ、170基を数えています。

埋没谷は遺物の廃棄場所として利用され、おびただしい数量の遺物が出土しています。包含層の厚い場所では1.5mにも達しており、また密度も非常に濃く、多い場所では1グリッド(4×4m)で土器片が数万点というすさまじさです。またこの中には黒曜石・チャート等の剥片・細片類が見られ、石器を製作していた様



縄文時代中期の住居跡



縄文時代中期の土偶



がうかがわれます。またクルミを主とした炭化物も多く見られます。

住居跡はこの土器廃棄場所と重なる場所から谷上へと造られており、重複が非常に激しく、また一軒の面積が比較的大きく、直径が

6m前後です。

遺物の中には土製品の土偶や耳飾りが見られ、特に土偶が多量に出土しており現在までに27点に達し、今後の調査でさらに増加すると思われま

(先行調査室 雪田隆子)

文化財講座 〈22〉

縄文時代と人々 (10)

縄文人の住まい(2)
 住まいの広さは古代から現代に至るまで、そこに住む人々の地位や経済状態をよく反映したとも言えるでしょう。

例えば、織田信長の安土城や豊臣秀吉の大坂城などは当時における社会的地位の強大さを顕著に表した好例といえます。縄文時代においても様々な広さの住まいが造られています。今回は縄文人が住まいの広さに対して、どのような意識をもっていたか、竪穴式住居を例にとり考えてみましょう。

まず、草創期から晩期までの住居跡を概観してみますと、早期頃までは竪穴の掘り込みが浅く、柱の穴も浅く、はつきりしないもの

が多いですが、前期以降は掘り込みのしつかりしたものが多くなっています。

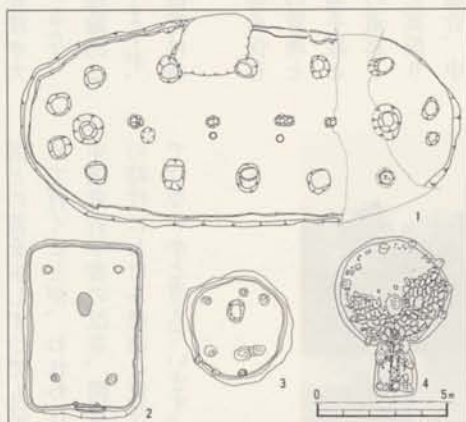
竪穴の平面形態は時期や地域によって様々ですが、円形(3)が多く、楕円形や方形(2)も見られます。珍しい形では、後期の関東地方を中心に柄鏡形(4)をしたものもあります。

さて、住まいの広さですが、関東地方における竪穴住居跡の時期別平均床面積を出した宮本氏によると、早期14.2㎡、前期20.5㎡、後・晩期32.8㎡となっています。

つまり、移動性の高い生活を送っていた早期頃までは、六〜八畳程のこじんまりした住まいが頻繁に作られ、定住性の高まりと共に床面積も拡大してゆき、耐久性のある住まいが一般的になっていったようです。

前・中期の20㎡位は六畳

二間程、後・晩期の30㎡位は六畳二間と八畳一間程の広さになり、5人前後の家族が暮らせる程度の住まいが定着していたと予想されます。また、富山県不動堂遺跡などでは大型住居(1)も発見されていますが、共同作業所として使われている



いろいろな住居跡

たと考えられています。

このように縄文人は家族のサイズ、生活スタイル、住居の使用目的などを指標として、住まいの広さを変えており、その広さで社会的地位が示されることになったようです。

(西澤明)



古墳時代後期の住居跡群(町田市小山・No.330遺跡)



No.9遺跡の住居跡群→

研修を終えるにあたって

陝西省考古研究所

助理研究員 焦南峰

東京都埋蔵文化財センターにおける考古学研修のために来日して半年程になります。その間にいろいろな調査研究の現状と共に社会や習慣などについて見る事ができ、また体験することができました。今回はこの紙面をお借りして中日両国の考古学の発掘調査と研究の現状と差異について簡単に述べてみたいと思います。

日本の考古学者は発掘調査の対象を主に旧石器時代から近世にかけての都市、墓葬、寺院、集落から水田、炭窯、陥し穴などまで、いずれも全面的に発掘調査を進めています。一方、中国の考古学者は隋・唐時代以前の都市、墓葬、集落、寺院、石窟、採掘場を重点的に調査を行っています。また、研究面からみても

両国に差異が認められます。日本の考古学者は型式学や層位学という伝統的な研究方法を進めると共に広範囲に実験考古学、環境考古学、実験考古学、地産考古学、水中考古学、産業考古学などを含めた関連科学との共同研究を進めています。中国では伝統的な研究法が大きな位置を占めているため、産業考古学などの理論的な研究はわずかにありますが、関連科学との共同研究は多くはありません。

さらに遺跡、遺物の保存科学、考古学資料の管理と活用、考古学の技術手段および発掘調査現場の道具を含めた作業環境の充実振りは日本と比較した場合、中国はこの面ではまだこれらからと思えました。

このような差異をもたらした原因は中国における悠久の歴史、豊富な遺跡と遺物、日本における考古学者の努力および郷土史研究などで市民と共に進めることのできた埋蔵文化財の保護

と調査体制に認められるのではないかと思います。

要するに、中国の考古学は欧米、日本などの先進国と比べると特質、長所があると同時に欠点も少なくありません。自らの特質と長所を発揮すると共に先進国の経験、技術を学び、先進国との差を少しずつも詰めて行くことが、われわれ中国考古学者の改革、開放の時代における義務と責任ではないかと考えています。



No.9 遺跡を見学する焦氏



「縄文世界への旅」(左)と縄文土器作り教室(上)



韓国の遺跡と

文化財を訪ねて

本年10月15日より六日間の予定で韓国を訪問した。

今回の研修の目的は、慶州、扶余、公州、ソウルの各地に残る主要な文化遺産を見学し、その現状を視察することにある。空路釜山に向い、陸路で慶州に到着すると、秋雨の続く日本よりも、むしろ温暖な気候に感じた。慶州では、仏国寺や皇南洞の大陵苑、国立慶州博物館を見学した。古都の名にふさわしく、遺跡の中に街があるという趣きである。「黄金しろ金に満みたく



公州宋山里6号墳の入口

ぶすま新羅の国」とうたわれたごとく、華やかな王陵からの出土品が博物館の展示室を埋める様には、いささか興奮した。

大正時代、浜田耕作・榊原末治両博士等により調査された、路西里の金冠塚、金鈴塚、飾履塚の遺物の数々をはじめ、戦後の調査で話題となった皇南洞の天馬塚や皇南大塚（新羅双墳）の遺物群のどれ一つをとっても、東アジアでは第一級の文化財と言える。また、天馬塚は積石木槨墳の内部が復元、公開されており、発掘時の様子が観察できるよううにしてあった。一部観光地化されているとはいえ、民族の遺産を保護・継承してゆこうとする熱意が窺われる。慶州の街はずれに、統一新羅時代の王陵が点在する。その一つ、武烈王陵では亀趺の石造が陵前にそのままの姿で保存されており、そのきわめて精巧な彫刻に驚かされた。慶州を後にし、百済の旧



武烈王陵前の亀趺

都公州と扶余に向う。慶州とはちがいが、静かな農村地帯がつづく。その一画の丘陵地上に百済王陵が築かれている。公州宋山里古墳群は、戦前に調査され、墳墓の石室や壁画古墳の存在でつとに知られるようになった。また、一九七一年には、偶然に百済武寧王・王妃の古墳が盗掘を受けず発見されたことは記憶に新しい。その夥しい量の副葬品が国立公州博物館に展示されていた。図録等では知っていたものの、本物の迫力には

圧倒される。環頭大刀や銅鏡の他、装飾品の数々は、新羅のものとはやや異なる文化の形をもち、むしろ中国南朝との関係を示す内容を有していた。扶余の陵山里古墳群は、まるで、奈良飛鳥地方の終末期古墳を髣髴とさせる構造を有しており、遠く海を隔てた文化の交流を思わずにはいられなかった。ただ、残念なことに、百済末期を知ることでできる資料がきわめて少ないらしく、今後の調査に期待がかかる。

ソウルでは、念願であった国立中央博物館の展示遺物をつぶさに観察することができた。とくに三国時代を中心とする古墳や、楽浪古墳からの出土品等は充実していた。戦前、谷井濟一氏が調査した昌寧校洞や新村里の古墳遺物をはじめ、楽浪彩篋塚や石巖里古墳から出土した漆器類を見た時には、思わず息をのんだ。そして、改めてその重要性を痛感せざるをえなかった。のべ六日間に及ぶ海外研修を終えてみると、忙しい旅行ではあったが、実にみのり多き旅だったと思う。今後の調査や研究にとつては大きな刺激になった。今、是非もう一度、韓国各地の遺跡や遺物を、ゆっくり見て歩きたい欲求にかられている。(松崎元樹)



扶余陵山古墳群

文化財映画鑑賞会

当センター創立十周年記念映画「森と縄文人」を中心に夏休み期間中、広く都民の方々に公開する目的から8月6日(木)午後1時半から開催されました。他の映画は新潟県奥三面の生活を題材とした「山人の丸木舟」、「ゼンマイ小屋のくらし」です。この催しは博物館実習生7名によってほとんど運営されたものです。小学生、年配の方々を中心に58名の参加がありました。



鈴木調査研究員による講義

石器作り教室

8月20日(木)午後1時10分からあらかじめ申し込まれた多数の方々から抽選された30名の参加者を対象に開催されました。鈴木美保調査研究員の石器についての講義から始まって、原川雄二、川島雅人、五十嵐彰調査研究員が指導に加わり参加者による石器製作まで行われました。



石器作りの実習(遺跡庭園にて)

展示解説を中心とした「縄文世界への旅」開催

学校5日制が初めて行われた9月12日(土)に当センター展示ホールの展示解説と映画「森と縄文人」の上映が午前、午後それぞれ1回都立調査センターと共催で行われました。先生とクラス有志のグループ、親子連れなどを中心に120名の参加がありました。

文化財講演会

9月19日(土)午後1時半から千葉大学文学部助教授岡本東三氏による講演「列島の先史文化をいかにとらえるかーその起源をめぐる二つの文化観ー」が行われました。

草創期の土器編年についての見解を中心に話されると共に、資料の見方、文化の捉え方などについて話されました。参加者は88名でした。

10月22日(木)午後6時半から2時間にわたって日

中国交正常化20周年を記念した講演会が行われました。講師は本紙に寄稿してくださった陝西省考古研究所助理研究員焦南峰氏で「都長安を掘る」と題して行われました。

法門寺地下宮殿、秦公1号墓の調査成果などについて話されました。スライドが約100枚と内容が豊富でしたが友人の袁靖氏(千葉大学大学院留学生)に通訳をお願いし息のあったお話が進められました。初めての夜の講演会で広報も十分ではありませんでしたが94名の参加者がありました。

縄文土器作り教室

10月17日(土)、18日(日)、11月14日(土)の3日間にわたり行われる、当教室は無事、最初の2日間を終えることができました。

今年は極めて多数の申込者がありました。抽選の結果32名の参加者が決定されました。

今年上映映画「森と縄文人」

講演会 北欧の貝塚文化開催される

10月26日(月)午後5時半から日本学術振興会の招きにより来日したデンマークのオーフス大学ソーレン・アンデルセン教授がスライドとOHPを交えて講演を行いました。

エルテベレ貝塚とその周辺地域の調査を最近の成果を踏まえ話されました。通訳は奈良国立文化財研究所松井 章主任研究員にお願いし、参加者は55名でした。



発行

財団法人 東京都教育文化財団
東京都理蔵文化財センター
〒206 東京都多摩市落合
1-14-2
☎ 0423-73-5296
平成4年10月31日